

やはり俺の高校生活は
気付かれないまま終わ
りを告げる。

tol10

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡は過去を見つめる。それは一体どうしてか。

彼は高校生活の中での一つの間にか変わっていた。

長々だらだらと書かれる長編シリーズ。初心者丸出し駄文でお送りします。
時系列的には学校祭の後と思ってください。原作未読。妄想録は読みました。アニ
メはしつかり見ました。

目次

序章	彼は自分の持つていたもの大きさを改めて思い知る。	——	1
第1章	彼は来た道を振り返りつつ足を止めることはなかつた。	——	4
第2章	彼女は彼女が知らないうちに時間が進んでいるのを気づきはない。	——	8
第3章	彼女は自分の無力さを思い知る。	——	12
第4章	彼女は彼ら彼女らのために再び動き出す。	——	17

第5章	彼の道は前も後ろも抜け道もないことに彼ら彼女らは気づきはない。	——	22
第6章	彼の道は気づかぬうちに大きくそれていた。	——	27
第7章	彼ら彼女らの過ごした時間はあまりにも大きかつた。	——	37
第8章	彼は道らしき道をようやく見つけた。	——	45
第9章	風は四方より吹いているのが現実である。	——	54
第10章	彼女の選択は大きな波紋をたてるには十分だった。	——	63

第11章 彼は無力で無自覚なことに気づく術を持たない。 71

第12章 人知れず、犠牲は作り続けられる。 81

最終章 彼ら彼女らはそれぞれの解を見つけ出す。 87

過去を振り返り、未来に向かう主人公。

序章

彼は自分の持っていたものの大きさを改めて思い知る。

高校生活は留年しなければ3年間で終わる。まあ、これを世のリア充（笑）どもは終わってしまう、と嘆き悲しむのだろう。そして「また会おうね」とかといって結局そのままであつたり、Lineやメールなどのやりとりでだんだん疎遠になつていくのだ。なぜばつちなのに分かるかつて？これは友達の友達のはなしだg……え？ いらぬい？ 言わなくていいの？まあ、別に構いやしませんが。

中学校とはまた違つた3年間で、卒業だろう。中学校は義務教育の終わりを告げ、小・中と共に、はたまた中学の3年間と共に、それとももつと短い時間か、過ぎしてきた人たちと違う電車に乗ることを悲しく思うものだ（これは俺の人間觀察という最強の特技を持つた俺の結論）。そして、高校は子どもの終わりを告げ、社会に出る不安などをお互いに慰め合い、励まし合い、鼓舞する一種の儀式だ（未経験だからなんとも言えんが、おそらくこうだと思う）。

まあ、そんなこと、今の俺には関係ない。成績優秀（文系）で、自意識が高い。特になにも感じず、ただただ機械的にこなしてきた俺。いや、訂正すべきところがあるな。なにも感じていないわけではない。うるさいなーであつたり、邪魔だなーであつたり、そのアニメの会話混ざりたいなーであつたり、俺の悪口そこまで言わなくてもいいと思うのになーであつたり。まあ、流石ばつち。盗み聞きが手馴れてる。聞こえるだけで聴きたいわけではない。

しかし、高校では深く関わった、そんな人たちがいたのだ。暴力教師に頻繁に呼び出されは腹を殴られノックアウトしてたり、文体がめちゃくちゃなライトノベル作家志望兼中二病兼自称八幡の友達であつたり、美少女にしか見えずテニスして毎朝あいさつを交わした天使であつたり、それから、（たしか）処女で見た目ビッチなアホの子であつたり、暴言・失言は吐くが虚言を吐かない見た目（ひと部分を除く）と中身が完璧で自らを曲げず優しい美少女であつたり。なかなか楽しかったと思う。いや、樂しかったのだ。今までに感じたことがないくらい、いい日々だつた。

そして今日だ。いつもよりも1時間以上遅く家を出て向かう総武高校。た

め息をつき、空を見る。天気は、晴れ。俺の心を晴らしてほしいとむちやくちやな願いを込めて、空から目線を下ろし、前に進む。なぜこうなつたかは予想ができる。しかし、なぜこのタイミングなのか、理解ができない。

「()に名前を、()に印を、明日までに」

「…………はい」

昨日の会話を少し思い出しつつ、俺は最後になる校門を越えていた――――――

第1章

ことはなかつた。

スリッパに履き替えて靴をしまう。こんなものは一年以上も同じことをしているのだから、ごくごく簡単な無意識で行う動作だ。こんなくだらない動作でさえ、今はくだらないとは思えなくなつていて。

「はあ」

ため息と覚悟を決める動作を同時にい、先に進む。目的地は、校長室だ。かばんから昨日渡された紙を取り出してドアの前に立つ。自分でもわかる。手が震えている。いや、それだけではない。体じゅうが震えているのだ。それでも、震える自分を、押し殺し、ドアをノックする。

コンコン

「――どうぞ」

ドアを開け、ここからの動作は単調なものだ。

「失礼します。昨日いただいたプリントを提出しにきました」

「……まで持ってきて」

その言葉に従い、紙を校長の前の前の机に置く。校長は紙をしばらく見つめた（書くべきところが書いてあるかの確認だろう）後、こちらを見た。

「では、明日より比企谷八幡を本校、総武高校より退学とする。今日は本校の生徒として扱うから自由に見て回るといい。お大事に」

「――失礼します」

そう言い、校長室を出た。ここで改めて自分の行動がわかつた。

俺は——退学届けを出したのか——

声に出すつもりはなかつたが、おそらくは咳くくらいの声量はあつたと思う。そして、校長に言われたとおり、自由に歩き回るとしよう。教室は、授業中か。なら、あそこに行こう。

長い長い階段を昇り、着いたところは屋上だ。ドアを開け、手すりを見る。相模が触っていたところだ。ここで葉山を利用して相模を体育館に移動させた。そこで、俺は相模に言葉を浴びせ、泣かせ、そしてこの退学につながつた。だが、後悔はない。俺のとつたその行動を、理解してくれる人達がいたのだ。正直、嬉しがつた。屋上をあとにして、次の場所に向かおうとした時にチャイムが鳴つた。おそらく放課の合図だろう。生徒との接触は避けたいから次のチャイムまでここにいるとしよう。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り響き、俺は立ち上がり屋上を出た。次に行くのは、ずっとお世話になつたベストプレイスだ。今は昼休みの時間じやないから少し風の角度が違う。

できれば昼休みの時間にここに来たかったが、仕方ないだろう。ここで天使と出会ったなー。いやー、天使だった。あそこのテニスコートで試合をしたな。中二病が俺のキヤツチヤーフライに名前とかつけてたな。さあ、最後は――

とある教室の前に立ち、あることを思い出す。鍵、いるよな。しかし、ドアは開いていた。

「なんで開いてんだ」

中にはいない。少し進むと長机に紙があつた。

第2章

彼女は彼女が知らないうちに時間が進んでいるのを気づきはしない。

君を守れなくてすまなかつた。
ご家族に説明すらできない私を許してほしいとは言わない、でも謝りたい。
すまない。

家庭で過ごしにくくなつてしましましたか。

勝手なことを言うが、君ならうまくやつていけそうな気がします。
でも、もし逃げなくなつたなら私のところへ来なさい。

責任を持つて保護します。

相談にも、いつでも乘ります。

話は変わるが、君がこれを読んでいるということは、やはり、ここが思い出
の場所ということでしょうか。

君がいなくなつて、この場所はすっかり変わつてしましました。由比ヶ浜が
あれ以来ここに来なくなり、雪ノ下の一人に戻つてしましました。メールや電話のやり
とりはしているそうですが、ここにいたくないということでしょうか。雪ノ下もノック

のことと言わなくなつたりなど、彼女らは変わりました。君の存在はやはり大きかつた
ということでしょう。

ただ、この文章は君を不安にさせたいわけではなく、ただ単に君はいなくて
もいいような人間ではないということを伝えたいだけです。

平塚静

――――――――――――――――――――――――――――

「やつぱりいい先生だよ、あなた」

心の底から思つたことだ。少し椅子に腰をかける。毎日放課後にここで本
を読んでいて、反対側には雪ノ下が本を読み、由比ヶ浜がその横で携帯をいじつてい
て――――

――――――ここに長くいたらいけないな。早く出ないと。涙が出てきそう
だ。早く、早く。

そう思いながら、ドアを勢いよく開けたらそこにはもう見てはいけない、そう思つた人がいた。

「比企谷君、なぜここに」

この問いに答えてはいけない。解を彼女に伝えてはいけない。だから、考える間もなく俺は走つていた。否、——逃げていた。

「比企谷君！」

そう叫んだときには彼はもう見えなくなつていた。なぜ、彼がここに。なぜ、今更ここに。疑問はたくさんあるけれど、あとで平塚先生に聞けばわかるかしら。彼が出てきたつてことは鍵が開いてるつてことよね。職員室に鍵はあつたのに。まあいいわ。早く入つて由比ヶ……依頼者を待ちましよう。

え？なにかしら、この紙。彼が置いてつたのかしら。いいえ、今更彼がそんなことするわけがないわ。じゃあ、誰のかしら？気は引けるけれど、見てみましよう。

――――――これは？

気づいたときには職員室の前に、私はいた。平塚先生に聞かないと。早く聞かないと。この紙の意味を。

トントン

「失礼します。雪ノ下雪乃です。平塚先生はいらっしゃいますか」

第3章

彼女は自分の無力さを思い知る。

「なんだね、雪ノ下」

「これはどういうことですか。説明してください」

私はさつきの紙を突き出す。先生が顔色を変えた、とまでは言わないけれど、とまどっているように見えた。

「なぜそれを？」

「比企谷君とすれ違いました。おそらくは彼の忘れ物でしょう。答えてください。これはどういうことですか」

「……はあ。どうしても聞くのか？」

「はい」

「あいつは、比企谷は、退学した」

「えつ？」

退学の意味を理解はすぐにできたけれど、頭が、体が、それに反応できない。持っていた紙は私の手から落ち、風に乗って職員室中を駆け回った。理由は？ 原因は？おそらく私にもそれに関わってる気がする。いえ、関わってるはず。だから、私はそれを聞かなければいけない。

「なぜですか」

「ここではなんだ、話ににくい。部室に行こう」

部室に行き、私は改めて問う。

「改めて聞きます。なぜ比企谷君は退学したのですか」

「誰にも言わないことが条件だ。これが呑めるのならば言うとしよう」

「勿論です」

「はあ、退学の理由は――――――」

ためが長い。どうしてこんなにためを作るのかわからない。そして、先生が次に口を開いた。

「――――――理由は、相模の一件だ。どうやらPTAや教師陣が校長先生のところに押しかけたそうでな。校長もその迫力に気圧されたのか、もともとその情報を持っていたのかは知らないが、すぐに行動に移したようだ。そして昨日呼び出しがあり、今日、退学届けを出しにきたということだ。そして、学校の思い出深いところを見て回っていた、というところだろう。そこで、君とすれ違った」

彼が本当の悪役になることで、相模さんを助けた一件が、彼を、彼の道を曲げた。そして、そうなった原因は私にある。私が勝手なことをやつて相模さんの居場所を奪い、捜索を比企谷君に任せてしまつた。彼だつて傷つかないはずないのに、それでも一人の人を救つた彼を、そんな彼の評判を落としたままにしておいた私が、原因。

「いつておくが、やけは起こすなよ」

「なぜ…ですか」

「比企谷のためだ。あいつは君に、君たちに影響が出ないやり方をとつたんだ。あいつが校長先生との会話中に一切君の名前も、この部のことと言わなかつたのだ。だから、君は、行動してはいけない。

もつといえ、比企谷が君を脅した、なんて理解をされかねないし、奉仕部や君たちが罰を受けかねない」

—————声が出ない。これで幾つかの疑問はなくなつた。なぜ先生がわざわざ言うな、なんて前置きをしたのか。由比ヶ浜さんには絶対に聞かれてはいけ

ないから。なぜ比企谷君があの日を境に部室に来ていないので、今更来たのか。それは
ここが大切な場所だつたから。なら、なら私は――――――――――――――――――――

「先生、お願いがあります」

第4章

す。

今日、平塚先生に呼び出されたから、部室に行くけど、ほんとはもう、行きたくないな。あの日から一度も来てないのに、足が反射的に進む。反射くらい意味わかるし！でも、ドアを開けれない。……でも、行かなきや。きっと、なにかあるから。…………でも、なんの用事なんだろ。

ドアを開けるとゆきのんがいた。いつもの位置に、いつもの、位置に――――――

「由比ヶ浜さん、早急に話さなければならないことがあるわ。こつちに来て座つてちようだい」

「う・うん」

私はいつもの、いつもの位置に座つて、ゆきのんの話を聞く準備をした。やつぱり、のことかな…ヒツキーとなにがあつたのかな、やつぱり。

「さつき、比企谷君と会つたわ」

やつぱり、そうなんだ。ヒツキーは――――

「勘違いしないでちようだいね。彼とは会話はなかつたわ。でも、そのときにこれを拾つたわ」

ゆきのんの白くて細い手に握られた紙が私の前に出された。え…なに、これ。どういう――――

「私も気になつて平塚先生に聞いたわ。そしたら、彼が、比企谷君が、退学するようなの。そこで、由比ヶ浜さんに；由比ヶ浜さん！由比ヶ浜さん！由比ヶ浜さん！」

最後の方にゆきのんが呼んでたみたいだけど、返事ができなかつた。

「————ん」

「由比ヶ浜さん大丈夫？」

「どうしたの？」

「あなた、急に倒れて。ここは保健室、頭とか、大丈夫？」

「ああ、ヒツキーが退学するって聞いたからかな。でも、でもそれって、
私の、私の————」

「比企谷君の退学の原因はあなたではないわ。原因は私が彼を————」

「————さがみん、のときの、だよね？」

「えつ!!?……、嘘はつけなさそうね。そ、そうよ。文化祭の一件が原因よ。
そこで、あなたにお願いがあるわ。比企谷君を連れ戻――――――」

「ヒツキーは、ヒツキーはあの日逃げたんだよ!!?連れ戻したって、つらい、
だけ・：だよ・：……」

「わかつたわ。ごめんなさいね。用件はそれだけだったのよ。で
も――――――」

「でも、ゆきのんのお願いなら聞かないとね!!?私はなにをしたらいいの?」

本当は、やりたくない。つらいから。でも、多分、ゆきのんもつらいと思う。
だから私も逃げたらいけない。ヒツキーが逃げたままなのもダメだし。

「由比ヶ浜さん……：

やつてほしいことはまず、彼と深く関わった人、材木座君、戸塚君、葉
山君を説得して味方につけてほしいの。でも、比企谷君のためにと言つてほしいの。退

学の話はしないでほしいの。できそうかしら?』

わざと、ありがとうってゆきのんは言わなかつたんだよね。多分、私の気持
ちがわかつてゐるから――――――――

「うん、わかつた!!? やつてみる!!?」

「よろしくね」

この時間だと中二は帰つちやたかな。彩ちゃんからかな、まず。ヒツキーと
一緒にいること多かつたし。

第5章

彼の道は前も後ろも抜け道もないことに彼ら彼女らは気づきはしない。

俺は昨日お別れをした総武高校にまた来ている。昨日は明確な理由だつたが、今日は意味がわからない。平塚先生に呼び出され、伝え忘れがあつたようだ。なら、なぜ呼び出す？自分で来いよ。てか、電話でいいだろ。まあ、おそらくは――――――――――

ガラガラ

奉仕部部室のドアを開け、そこにいたのは美少女二人。彼女らはいつもの場所にいた。ただ、いつも通りじゃないのは、彼女らがキヤツキヤウフフな会話をしていることと、俺への挨拶がこないことだ。その代わりに、こちらに注目している。最初に口を開くのは、やはり彼女だ。この呼び出しの主犯であろう、彼女。

「久しぶりね、比企谷君。待っていたわ」

所に座る。

この状況じやなかつたら嬉しさのあまり死にそうな台詞を聞き、いつもの場

「何の用だ？」

「あら、なぜ部員を呼び出すのに用がいるの？」

「部員じやないだろ俺は。退部届はちゃんと出した」

「認めた記憶なんてないわよ」

「否定された記憶もないぞ」

「————まあいいわ。ではお望み通り、用件に移りましょう」

「あのね、ヒツキー。いろいろと聞きたいことがあるの」

実――――

も。」

「ふざけないでヒツキー!!? どうしてそうやつて逃げるの? あの日も今回
今回つてなんだ?」

「自分からは言わないつもりなのね、あなたは」

雪ノ下はいつも以上に眼が怖いし、由比ヶ浜はなぜか真剣な眼をしてるし。
本当になんなんだ?まさか、平塚先生が口をわつたか。

「なんで頼つてくれないの? 退学のこと。いつもいつも勝手に一人でやつ
ちやつて。ヒツキーは独りじやないのに!!?」

「――――――頼りようがないだろ。俺とお前らが関わつたらダメなんだ。
平塚先生から聞いてるだろ?」

――――――沈黙が降り注ぐ。彼女らもわかっているのだ。自分たち
じやどうしようもないことを。今回に至つては俺が悪。完全な悪だ。俺のやつたこと
を理解できるやつらは少數で、且つ他に居場所を持つている。由比ヶ浜は上位スクール
カースト、戸塚はテニス部だし女子からの人気もある、平塚先生は教師だから生徒に対
して平等でなければならないし、雪ノ下でさえ由比ヶ浜という友達ができるて独りでなく
なつた。いくら俺と関係を持つていても、俺との繋がりはその程度なのだ。悲しくはな
い。これが俺だ。ぼっちを極めた俺の道だ。

「これ以上、用がないようならもう帰るぞ。じやあな。」

これでいいのだ。俺は彼女らに対してもあの言葉を発してはいけないのだ。
だから、これで終わりだ。

「待ちなさい!私が、私たちが、なんの策もなしに呼ぶわけないでしょ。こ

れを見なさい」

「これ、集めたんだよ。だからさ、ヒツキー、私たちを頼つてよ」

出された紙には、俺と関わった人の名前が綴られていた。

第6章 　　彼の道は気づかぬうちに大きくそれでいた。

紙には、戸塚と材木座と葉山と由比ヶ浜と雪ノ下の名前が。

「比企谷君が困つてるって言つたら有無を言わずに書いてくれたわ。これでも、まだ逃げられると思つてているの？」

「はあ……よくやるな。彼女らは行動したのだ。逃げた俺を戻すために。これで逃げる訳もないか。」

「…………すまん材木座。本気で忘れてた。気軽に忘れられるあたり、やはり奴はぼつちということか。いい奴なんだなお前、知らなかつた。」

「学校側としても私と葉山君の名前があることで、十分な力になると思うのだけれど。どうかしら、比企谷君？」

「お前らからは逃げ切れるわけがないことがよくわかつた。もう逃げるのは、やめだ。だが、まずそれを片づける。だから、それが終わってからでいいか？あの日のことは」

「ええ、勿論。まずは目の前の問題から片づけましょう」

「いいよ、ヒツキー!!？」

二人ともすごい笑顔だ。胸が痛む。だが、今はそれを置いておく。まずは目の前の問い合わせを導き出す。そのためには――――――

「雪ノ下！由比ヶ浜！」

ためを作る。ずっと出せなかつた、出さなかつた言葉を。今まで俺を苦しめてきた言葉を。裏切りのない彼女らに、この言葉を言う。――――――

「俺を助けてくれ。お前たちを、頼らせててくれ」

すると彼女らはさらなる笑みを浮かべて、

「仕方ないわね。助けてあげる」

「しょーがないなー、ヒツキーは弱いもんね!!?」

————で、このあと何をすればいいかが全く思いつかない。

「んで、何すんの?」

「それで、何をすればいいかしら?」

「次は何しょーか?」

————えつ!?お前ら決めてたんじゃないの?!

「ええと、ひとまずこの紙を校長先生に突き出せだいいのかしら?」

「それ以外ないか」

「うん…… そうだね」

早速出鼻をくじかれていた。どうしてこうなつた。まあ、目的は決まつた。次は行動に移すとしよう。

「俺が行つたつて、反感を買うだけだ。お前ら一人で行つてくれ。それで、この紙をベストのタイミングで出せ。その後は、まあ、わかるか。会話での主導権は雪ノ下が握つてくれ。由比ヶ浜だと、流石に心配があるし、学年一位のお前がやつた方が効果的だ」

「なら私一人でいいんじゃないの？」

「由比ヶ浜はバカでアホの子だが、空気の読み取りはお前より遥かにうまい。そういうことだ」

「なるほど、そういうことね」

「……ねえ、なんで私がバカとかアホの子とか言われてるの？ゆきのんもそれで納得しちゃってるし。なんか、納得いかない!!？」

「よし、それでは健闘を祈る」

「由比ヶ浜さん、その話はこの件が終わったら問い合わせせばいいわ」

「うん、そうたね。ヒツキー、覚悟しててよ!!?」

えー、うそー。雪ノ下の奴、さりげなく無罪を勝ち取つていきやがつた。全部俺に押し付けやがつた。まあ、あの奉仕部の日常が戻つてくると思えば楽しきたして、戻つてくるのだろうか。いや、戻れるのだろうか。彼女らと奉仕部で過ごしていいた日常に、本当に戻れるのだろうか。ダメだ。今は違うことを考えないようにしよう。

—————

コンコン

「どうぞ」

「失礼します。雪ノ下雪乃です。」

「失礼します。由比ヶ浜結衣です」

「お話があります。ます、比企谷君の退学理由を明確に教えてください」

校長先生の顔つきが少し変わった。どうして知っているのか、といった顔ね。苦い顔をして校長先生は口を開いた。

「……言えない」

「言えないってどういうことですか」

「言えないものは言えない」

校長先生の眼が私をじっくり見たあと、ちらりと由比ヶ浜さんの方に動いてすぐに戻

した。まさか……！

「由比ヶ浜さん、出直しましょう」

「え!!? でも、まだ紙を——————」

「失礼します」

「待つてよゆきのん!!?」

ドアを開けて外に出る。おそらくこの一件、私が原因。いえ、やはり、というべきか
しら。

「由比ヶ浜さん、先に戻つて比企谷君と少し待機していくもらえるかしら?」

「えつと…… あ、うん。わかつたよ!!?」

彼の道は気づかぬうちに大きくそれていた。

由比ヶ浜さんが去ったあと、私は踵を返し、再びあそこへ向かう。

ふふつ。ゆきのんもトイレ行くんだな。ひとまずヒツキーのところに戻ろ。

「やつはろー!!? ヒツキー!!?」

「んで、どうだつた？ てか、雪ノ下は？」

「あいさつくらい返してよ…… ゆきのんは多分トイレに行つたよ。玄関の近くで先に行つてつて言つてUターンしていつたから。それから——」

「おい！ お前はバカか！」

「な、なんでそんなやつて————」

校長室と玄関の間にトイレはないだろ！取り敢えず何があつたか教える！」

「他には何かなかつたか？校長の仕草とか」

「うん。あ、そういえばゆきのんのことじつと見てた気がするな。まあでも、ゆきのん美人だし、頭いいし、それは仕方な——」

「何でそれで気づかぬんだよ！」

ヒツキーは走つていつた。……訳がわからないよ。でも、なんでだろう。――――つて追いかけた方がいいよね。

「待つてよ。ヒツキー!!?」

どこで間違えた？どこでこの問い合わせを取り違えてた？今まで解は間違つても問い合わせ間違えることがなかつたから考えなかつた。——ちくしょう、そもそも相模の一件は別にいじめでもなればなにか証拠があつたわけでもない。そんなことで学年国語三位を辞めさせるわけもない。もつと、違うところだつたんだ。違うところで——

走つていると雪ノ下を見つけた。だが、彼女は——眼を赤くして、ただ一直線に、歩いていた——

「おい！雪ノ下！」

第7章

も大きかつた。

私は由比ヶ浜さんと別れたあと、校長室に向かつた、一直線に。そして、先ほどと同じ動作で入室する。

「それで、先ほどの件ですが」

「君一人か？雪ノ下さん」

「はい」

「理由だつたな。お母さんから聞いてないのか？本当に」

「母が原因なんですか」

彼ら彼女の過ごした時間はあまりにも大きかった。

「聞いてないようだな…… 実行したのはそうだが、原因は違う。だが――――――」

「早く教えてください！」

自分でもわかつた。語尾が強くなつたことが。そして、原因が――――――――

「原因是、君だ。雪ノ下さん」

そこまではわかつてた。でも、それ以上を知らない。なんで私が原因なのか。

「なぜ私が原因なのですか」

「直接話しなさい。繋がつていてる」

そう言い、受話機を私に渡した。

「もしもし」

『雪乃、言いたい放題言つてるわね』

「お母さん……」

雪ノ下家で最大の、言い方は悪いけれど、権力者。

「なぜこんなことをしたの？」

『あなたのためと、雪ノ下家のためよ。あんな男といたつて利益がないわ』

あの男というのは、まず間違いなく比企谷君。でも、どうして私の知っているの？監視されてた？いいえ、あの人はそんなことしない。じゃあなぜ？でも、今はそれ以上に重要なことがある。

「それと、由比ヶ浜さん？だつたつけ？彼女もあなたの邪魔なのよね？理由をこじつ

「さて、退学もさせられるけど？」

〔一〕

言葉が出ない。声が出せない。ここまで感情がはつきりすることがあるのね。それでいて、頭は冷静。

無言で受話機を置いた。もう私には、なす術がない。母が相手、これだけでもう勝てない。彼を、比企谷君を、助けるどころか、由比ヶ浜さんすらあと一步で巻き込んでしまうところだった。

私は無言で退室した。

私が原因で、彼が。しかも、相模さんの一件とはわけが違う。あれは、まだ彼が能動的に動いた結果。だから、彼も納得して退学届を出した。でも、これに関しては彼に非はない。————視界がぼやけるのがわかる。多分、私は泣いている。でも、もう彼には会えない。だつて————

「おい！ 雪ノ下！」

——ダメ——ダメ——今、会つたら、今、話しかけられたら、私は——早く逃げないと。私は踵を返し走り出そうとする。

「待て、雪ノ下！ どうした！」

彼の声が聞こえる。彼が大きな声を出すところは見たことないし、ましてやその声を聞いたこともない。とても聞きやすくて、とおる声。でも、聞いてられない。早く逃げないといけないのだから。

「待てつつてんだろ！ 雪ノ下！」

彼の声が近づいてくる。これ以上、近づかせてはいけない。早く諦めて！

強く右手が引っ張られる。——追いつかれてしまつたのね。比企谷君はいつも逃げるのに、ほんとうに、諦めが悪い。

「何があつたか話してもらうぞ。いいな」

でも、これを話したら、話しちやつたら比企谷君も由比ヶ浜さんも――――――

「他人は逃さないのにお前は逃げるのか！」

強く引つ張られてた手をさらに引つ張り180度、比企谷君の方を、向かせた。彼の顔は近くにあるのによく見えない。――――今は話せない。

「今は落ち着きたいの。一人にさせてちようだい。」

「じゃあ、話せるくらいになるまで落ち着いてこい。ただ、お前がその間に傷を負わないということが、条件だ。」

「……わかつたわ」

そう言うと、彼は手を離した。そして、

「二人で待つてる。必ず来いよ」

「ええ」

比企谷君は戻つていった。彼は行動が相変わらず、早い。そして、私を理解してくれてる。あそこで何も言わなかつたら私を離すことになる。きっと、私はあの場所、私の大切な場所に戻れなくなるような、ことをしたと思う。

—————

ヒツキーが、ゆきのんが何か話すけど、その準備がいるって言つて部室に一緒に帰つてきてから、30分はたつたのかな。ゆきのん、何するんだろう。というか、何をしてきたんだろう。気になるけど、多分そのことを話すのに覚悟みたいなのがいるんだよね。だから、電話もメールもしない。ただ、待つの。

「ねえヒツキー」

「ん？ なんだ」

「なんで、――――――」

少し心を落ち着かせる。私も、多分ゆきのんも、ヒツキーに聞かなきやいけないことが、聞きたいことがある。

「なんで私の、ううん、私たちからの告白から逃げたの？」

そう、ヒツキーはあの日、私たちからの告白から、逃げたんだ。その理由は、知らなきやいけないことだし、知りたいこと。だから、この答えが聞きたい。

第8章 彼は道らしき道をようやく見つける

「なんで私の、ううん、私たちからの告白から逃げたの？」

このタイミングで聞かれるのか。さあどうする。ここで聞き流すのは難しいことではない。俺は眼を瞑つて考えてごとをしてる時だつたから寝て いるということで無視もできる。が、まあ愚策だろう。というか、そんな逃げ方はしたくない。だから解を伝えなければならない。だが―――それは―――

「あいつが来たら話す。で、いいか？」

「……………わかつた」

できる限り簡潔に伝えたい。だからあの日のことを思い出してみよう。まずはそこからだ。

ガラガラ

雪ノ下だ。眼の赤みはとれていないが、顔の赤みはとれている。眼の赤みを除けばいつもの雪ノ下、というわけではなかつた。手も足もほんの僅かだが震えが残つてゐる。まあ、あんな大泣きした後だ。寧ろ大して時間がたつていなかから、ここまで戻せるだけでもすごいことだろう。

「待たせたわね」

「ゆきのん大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫。ありがとう」

少し笑みを浮かべた表情で雪ノ下が言つた。だが……

「落ち着いたようだからとつと話せ」

ふうと雪ノ下は息を吹く。そして、口を開こうとする。開こうとするだけだ。開けていない。

「ゆきのん。とりあえず座つて。先にヒツキーから話したらいいしさ。その間に落ち着—————」

「それは無理だ。今この状況での最優先事項は雪ノ下の話だ。俺の話じやない」

「ええ、そのとおりよ。でも…………でも…………」

もう少し待つてと言いたいのか、聞かせたくないのか。まあそんなところだろう。

「待つと言ったのはこつちだ。いくらでも待つててやる」

「そうだよゆきのん」

「そう……では、甘えさせていただくわ」

そう言い終わると雪ノ下は眼を瞑つた。そして、それから10分ほどたつただろ
うか。雪ノ下が口を開く。

「まず、比企谷君の退学理由は、私と接触したから。私の母が校長先生を脅すか何かし
て。というところかしらね。あくまで予想なのだけれどね」フウー

言い切つたのだろう、一息ついた。だいぶ調子が戻ってきたな。雪ノ下らしい態度
だ。だが、それだけの説明で納得するやつなんていないだろう。

「ゆきのんと接触しただけでそんなことになっちゃうんだ。でも、それはゆきのんのお
母さんがいけないよ!!？」

…………」いつを忘れてた。アホの子代表・由比ヶ浜結衣。あの説明が全てじやな
いだろ、どう考えても。

「单刀直入に聞くが、お前、家で何かしたか?」

「!?!?」ピクツ

当たりか……

「姉さんから聞いたの?」

「いや。ただ単に予想しただけだ」

「…………ええ、そうよ。母に…………逆らったわ…………」

これは思つてた以上にややこしくなりそうだ。まさか雪ノ下さんの言つてたことが起ころとは…………

—————一週間前—————

「ひやつはろー比企谷くん♪」

「…………どうも」

「比企谷君、なんで今ここにいるの」 ギロツ

「な、なんでつて。どういう意味でしようか」

意味なんてわかつていた。だが、それを事実だと認めてはいけない。だから、俺は眼の前の相手に話の主導権を握らせてはいけない。

「まあ、そうやってしてるならそれでいいけどね」

「なんのことですか…………」 アキレ

「バイバイ、比企谷君」

「さよなら雪ノ下さん」

そう言つて俺は踵を返す。だが、それは少しの時間、止められることになる。

「あ！ そだつた、比企谷君！ 雪乃ちゃんと深く関わつたんだから、無傷の撤退なんてできなによ！」

聞こえなかつた。そう自分に言い聞かせる。だが、無傷つてなんのことだ？ 俺は十分に『自分で言うのもなんだが』傷を負つてる。雪ノ下さんがそれに気づかないわけないだろうし。まあいいや。今日はたくさん泣こう。今までの時間を水に流すためにも

.....

—————

無傷では撤退できない、か.....

まさか物理的意味だとは思わなかつた。これが代償というところか。彼女たちを自分勝手な考えで傷つけたのだ。このくらいあつても仕方ない。今、そう思う。が、これ

を受け入れるわけにはいかない。だから、これを聞く。

「逆らった理由は？」

「最近の、私の生き方に文句を言われたの。人と共に、なんて母は私に望んでいないもの。それに反論したわ」

「なるほどな～」

雪ノ下。お前はまだ気づいていない。お前は母に逆らつてもいいなし反論もしている。おそらく、した気になつてているだけだ。……………までよ。もしかしたら、いけるかもしれない。俺が退学しなくて済む道に……………

「雪ノ下。携帯を貸してくれ」

「あら。私の携帯でなにをする気かしら。汚らわしい」「ヒッキー、それは流石にきもいよ……………」

なんであの重たかつた空気の中でこんな俺を口撃することができるんだのよ。

「雪ノ下さんに連絡したい」

「姉さんに？」

「俺が退学しないために、だ」

「え？？」

「ほえ？？」

第9章 風は四方より吹いているのが現実である。

「もうこの時点でカードは全て出ている。あとは、その使い方だ」

「それが姉さん、なの？」

「ああそうだ」

「でも陽乃さん、難しいとかそういうレベルじゃないよね。どうするの？」

「お前は人の話を聞いてないんだな」

「そんなことないよ!!?ちよう聞いてるよ!!?」 プンスカ

由比ヶ浜もいつもどおりに戻つたな。一先ず安心、か。
さて

「カードは全て出でていると言つただろ。最強のカードを得るために今あるカードの大半を使うがな」

「…………まあ、そういうことなら貸しましよう」ハイ

「すまんな」パカツ

雪ノ下さんを今から相手にするのか…………
かなり、切羽詰まつてるな…………

これは賭けだ。勝率はよくて二割といったところ…………

プルル プルル

『もしもし？ 雪乃ちゃんから電話なんて何かあつたの？』

「もしもし。雪ノ下さん、比企谷です」

『なんだ～比企谷君か～』

このときの声はほんとに寂しそうだった。だが、そんなことを気にしてる暇はない。

「明日会えますか？」

『おおつと～？～デートの誘いか？誘いなのか？』ルンルン

「はい」

『それでいつどこがいいの？』

急に声が落ち着いた、そんな、いわゆる真剣な声になつた。雪ノ下さんの言つた「デー
ト」というのはおそらく一対一で話すのか、というものだろう。

「そちらに合わせますよ」

『こういうときは男の人が決めるんだよ?』

「俺は暇ですので。雪ノ下さんは忙しいでしよう?」

『ん、じやあ駅前のスーパーのフードコートに11時』

「わかりました。それじゃあ』

『あ! そうだそうだ。比企谷君♪』

無視したい。あのときのように。だが、同じ轍は踏まないためにそれはできない。

「なんですか?』

『せいぜい頑張つて、ね』

「……………はい」

こちらの目論見はわかっていると考へてよさそうだな。だが、そんなことよりも、ただ雪ノ下陽乃の声に、その重さに、腰を抜かしていた。動くことすらしばらくはできていない。呼吸はどうだ、全くできていない。時計の針が、全く進まない。こんな状況になることなんてあるんだな。

「雪ノ下、ありがとう」

「お疲れ様」

「お疲れ!!?」

「さてと。んじや、今日はもう帰るか。また明日な」

「ヒツキー、まだ話してないよ?」

そうだ。今日中にやらなければならぬことがまだあつた。

「なんのことなの？」

「あの日の、こと」

「…………それは聞かなければいけないわね」

まずい、考えてなかつた。いや考えてはいた。それがさつきの会話でどこかに飛んで
いつたのだ。だからどうする———

「比企谷君」

「は、はい」ピクツ

「無理して話す必要はないわ。今は姉さんのこと気に集中しなさい」

「いや…………でも…………」

悪い。そうさせてもらう

「ちょっとヒツキー!!? 約束が——————」

「由比ヶ浜さん。彼は今から姉さんを相手にするの。万全な態勢で挑まないと勝てっこないわ」

「……………わかった

ヒツキー、後でちゃんと、話してね」

「ああ、すまん」

はあ、まさか俺が約束を破る日がくるとはな。
まあ、今は彼女らに甘えさせてもらおう。

「じゃ、また明日」

「何故そんなに私たちに明日のことを言いたくないのかしら?」

「どういう意味だ」

「比企谷君の性格からの推論、といふところかしら」

「ふえ? どういうこと?」 クビカシゲ

「雪ノ下、推論は根拠がないとたたないぞ」

「根拠、ね」 ギロツ

「ん!?!?」 ピクツ

なんなんだよ、あの顔。思わず眼を逸らしたじやねーか。
だが、彼女の顔はおそらく…………
いや、あくまで俺の予想だ。相手を理解するなんて傲慢なのだ。

「…………まあいいわ。明日、証明してあげるわ」

「ふえー…………」 ポカーン

由比ヶ浜がアホで助かった。彼女が気づけばこの場所を…………潰しかねない

「じゃあな」 ガラツ

勝負は明日だ。カードを得られるかどうかでこれからが変わるどころか、打つ手がなくなる。

しかし、さつきの彼女の顔は俺には…………悲しむような、そんな表情だつた。

第10章 彼女の選択は大きな波紋をたてるには十分だつた。

場所は駅前のスーパー、時刻は10時半。約束の時間までは30分ある。が、まあ問題はそこじやない。どうしてこうなつた――――――

「比企谷君、姉さんは強いわ。心してかかることね」

右に雪ノ下がいる。由比ヶ浜は学校だ。当然だ。だつて今日平日だもん。

「今日学校に行かなくていいのか?」

「単位は問題ないわ」

「んで、そろそろ種を話せ」

「昨日、あなたが帰つてから姉さんに電話をかけたわ。そうしたらこの時間にここと教えてくれたわ」

「由比ヶ浜はどうしたんだ？」

「彼女の成績、あなた知らないの？」ヤレヤレ

「ああ、なるほどな」

すまん由比ヶ浜。あつさり理由がわかつてしまつた。

とそんなどうでもいい会話をしていると、

「ひやつはろー！・雪乃ちゃん、比企谷君」

カードの登場だ。

「雪ノ下さんが話すから二人きりでの会話じゃなくなつてしまつたんですが
.....」

「まあまあ、ていうか挨拶くらいしてよ！」

「比企谷君、私は席を外した方がいいかしら？」

「いや、気にするな」

「ならそうさせてもらうわ」

「雪ノ下さん」

「なんだい？」

「協力してください」

「ん、嫌だ」ニコツ

「うつ…………全部お見通しですか」

「全部かは知らないけどね。お母さんには逆らいたくないもん。雪乃ちゃんと違つて、
ね」

どうやら全部知られているようだ。この人の情報網はどうなつてんだよ

「ふうー…………」

いい加減、覚悟を決めるか。
覚悟、か……

「なら、協力してくれる条件はなんですか？」

「ん、そうだな～…………」

ためが長い。まあこの場合は長く感じるだけだろうが。

「うん、そうだね。まあこの場合は長く感じるだけだろうが。

どうしてそうなるんだ。なんだ？俺にはそのくらいしか価値がないということか？雪ノ下さんはこちらを完全に把握しているがこつちは雪ノ下さんの意図すらわかつてない。そもそもが間違いだつた。この人と勝負すること自体が。勝負にすらならない可能性を考えてなかつた。勝負すればの可能性を計算したが勝負できる可能性を考慮してないから二割が出ただけだ。今この場で、それを計算した場合…………5%もないじやないか…………

なんなんだよこの人は。そして、この条件をのむわけにもいかない。彼女たちには俺が出した解を教えなければならない。だが、今の目的はなんだ。なら、この条件をのむしかない、な…………

「雪ノ下さん。その条件でお」

願いします。と言おうとしたが、雪ノ下がそれを妨げる。

「比企谷君、喉が渴いたわ。何か買ってほしいのだけれど」

何か考案もあるのか？まあ、俺より雪ノ下の方がこの場合は適任だろう。

「ああ、わかつた。雪ノ下さんは？」

「じゃあお願ひしよつかなー」ニコツ

俺は席を外し、雪ノ下に任せた。

飲み物を持つて席に戻ると話し合いは終わってたようだ。結果はどうなった。

「比企谷君、さつきの条件は撤回。君には無条件で協力してあげる。お母さんに比企谷君の退学のこと話してあげる。」

「ありがとうございます」ペコツ

「じゃあね、比企谷君、……雪乃ちゃん」

なんだ？ あの人らしからぬ、寂しそうな声は……

「比企谷君、用事も済んだことだしもう帰るのかしら」

「まあ、特にすることもないしな」

「なら、私の家に来ないかしら？」

「……………へ？」

「勉強を教えてあげるのよ。勘違いしないでちようだい。由比ヶ浜さんにも悪いもの。でも、その理由でなら彼女も許してくれると思うから。だから、ダメ？ かしら……」

「…………ああ、わかった」

「由比ヶ浜さんにはちゃんとメールしておくから、心配しないで」パカツ

彼女は携帯を開いてメールをする。まあ、俺からじやよく見えんが。まあでも聞きた
いこともあるし。

それにもしても彼女はなにをこんなに……焦っているんだ

第11章 彼は無力で無自覚なことに気づく術を持たない。

プルル

あつ。ゆきのんからメールだ。陽乃さん、協力してくれたかな?で、どれどれ内容は

『雪ノ下です。姉さんは無事協力してくれることとなりました。それで、これから比企谷君に勉強を教えるために家に招きたいのですが、いいですか?』

ゆきのん、なんで毎回メールだとこんなに敬語使うんだろ。まあゆきのんらしいけどね。

『いいよ、一、

ヒツキーにしつかり勉強教えてあげてね(=、▽、)人(-、▽、)=)

あと私にもそのうち教えて……（・ω・）ノ』

つと。でも、なんで勉強するだけなのにわざわざメールしたんだろ。やつぱり公平
じやないって思ったのかな。でも、何か違和感？みたいなのがある気がする……

――――――――――――――――――

「どうぞ上がって」

「お、おじやまします」

「そこに座つておいて。飲み物持つてくるわ」

「あ、ああ。頼む」

彼、落ち着きがない。なぜかしら。まあだいたいの予想ならつくけれども。

「はい」コトツ

「ありがとう」

「それで、やる教科は数学と理科、どちらがいいかしら？」

「国語やりたいんだけど」

「国語なんて教えてあげられることないじゃない。あなた学年三位でしょ？」

「ちつ……」

本当に理系科目やりたくないのね。

「なら数学やりましよう」

「げつ」ウワツ

「まずはここからやりましょう」

.....

「いえ、だからこの公式でここに入るでしょ？」

「ああなるほどな」

彼はやればできる。やればできるだけあつて今までどれほどやつてなかつたかがわかる。

.....彼ともつと一緒にいたい。できる」とならこのままずつと。でもそれはできない。

「んじや、きりもいいし、そろそろ帰るわ」

「えつり? いえ、ご飯、作るから食べていいって」

「いや、でも、それは…………」

「由比ヶ浜さんには許可を貰つたわ。今度、由比ヶ浜さんが料理作るから食べてあげてね」

「はあ…………わかつた。お言葉に甘えさせてもらう」

.....

そんなに難しいものは作らなかつたけれどわ、彼はすぐ喜んでくれた。

「うめえ！やつぱ雪ノ下の料理最高！」

「そ、そんなことは…………」

「ありがとう…………」「カオマツカ

「ところで雪ノ下」

「なにかしら」

「雪ノ下さんとの交渉内容を教える」

「母に逆らつたことを謝ることを条件として出したわ」

「そうか。すまないな、俺の退学回避のために」

「別に構わないわ。それに…………」

「ん？」

「あなたのためだもの」

「そ、そ、う、か…………」 ブイツ

彼は気づいてないと思うけれど、彼の顔真っ赤になつていて少しその……面白い
…………わ…………

プルルル

私の携帯が鳴り響く。彼は手で出てどうぞ、という合図をしてくれたので、私は出ることにする。

「もしもし」

『ひやつはろー雪乃ちゃん!』

「それで、比企谷君のことは?」

『大丈夫だよ。比企谷君は退学しなくて済むって』

「そう……」ホツ

『雪乃ちゃん、ほんとにお母さんに謝るの?』

「ええ、条件なのだから」

『そう。それじゃあね雪乃ちゃん。それから、ごめんね』

「気にすることはないわ。おやすみなさい」

「これでこの件はおしまい。彼に報告するとしましよう。

「比企谷君、退学は取りやめになつたそうよ。よかつたわね」

「そうか……ホツ

「ありがとう」

「気にすることはないわ。私は私のやりたいことをしただけなのだから」

「んじやそろそろ帰るわ。また明日な」

「ええ、また」

行かないで…………

もつと私の近くにいて…………

「今日はありがとな、いろいろと」

もつと話したい…………

彼の顔を見てみたい…………

「じゃ」ガチャ

でも…………

それは叶わないこと…………

「ひつく…………

ひつく……………」 ポロポロ

私は泣いていた。うずくまつて泣いていた。

「比企谷君、好きよ。愛してる…………」

できることなら彼の返事を聞いたかった。彼が由比ヶ浜か私、どちらをとるのか。

でも、もうそれすら叶わない。

もう彼とは――――――――

――――――――会えないもの――――――――

第12章 人知れず、犠牲は作り続けられる。

視界が暗い。なかなか眼が開かない。朝はしんどい。てか、めんどい。
まあ、グダグダ言つたつて眼を覚まさなければならぬのだから、先延ばしにする必要はない。早急に済ませよう。

時計の針を見ると、8時を回っていた。

なぜこうも落ち着いているかと言うと、今日は土曜日なのだ。休日はだらけるにつきる。

とりあえず、ゲームだ。ゲームをしよう。

ピーンポーン

つと誰かが来た。誰か？由比ヶ浜？雪ノ下？どっちにしろ礼はちゃんと言わなきやいけないし。そそくさとドアを開ける。そこには俺が一番に礼を言わなければいけない。

いような、そんな相手が息を切らしていた。

「どうしたんですか、雪ノ下さん」

「比企谷君！ 雪乃ちゃんが、雪乃ちゃんが！」

雪ノ下？

「雪ノ下がどうしたんですか？」

「…これが…雪乃ちゃんの…部屋に…」 ハアハア

俺はそれを受け取つた。

『ごめんなさい

私の勝手な行動を許してください

姉さん。最期まで素直に話せなくてごめんなさい

由比ヶ浜さん。私にとつてはたつた一人だけれど最高の、友達です。結衣、つて呼ん

でみたいつて最近はよく考えてました。

比企谷君。好きだわ。できれば返事を聞きたかったわね。例え、振られたとしても。
それから、ありがとう。

奉仕部3人で過ごした毎日は私にとって、とても大事な、思い出です。ありがとう。

お元気で

雪ノ下雪乃

』

最期にいくにつれて円形のしみが多くなつていてる。

「雪ノ下さん、雪ノ下は今どこに」

「わ…わからないわ…

少なくとも…部屋や実家…にはいなかつたわ…」

「探してきます」

「比企谷君！ 雪乃ちゃんを…もう…一人に…させないで…あげて…お願ひ…」 ポロポロ

「一人にする気も、させる気もありません。あいつは一人じゃありませんし」

「比企谷君、よろしくね」

この顔と声を、俺は前にも聞いた。文化祭のときに、雪ノ下から………
なら俺のとる行動は

スツ

あのときと同じ動作をした。あてなんてない。片つ端から行くしかない。やはり最
初に行くのは――――――――――――――――――――――――――――――

――――――学校だ――――――――――――――――――――

奉仕部の部室は

ガラツ

ちつ。いない。思いたくはないが、やはり屋上か。

ドンツ

ハアハア…ハアハア…

屋上の奥には、手すりを触っている、美少女がいた――――――――

「見つけたぞ、雪ノ下あ」ハアハア

「ひ…比企谷…君…」

「悪い、少し休ませてくれ。とりあえず、こつちに来い。話がある」

「…………ここに来た、ということは紙を見つけたのかしら？不法侵入は犯罪よ？早く自首してきなさい。自首は刑が軽くなるのよ？」

「…………お前は相変わらずだな。安心しろ、見つけたのは雪ノ下さんだ」

「なんにせよ不法侵入なのだけれど」

相模のときは訳が違う。この場で、目の前の彼女を救わなければならない。今は、この一連の出来事の原因は、俺なのだから…………

最終章 彼ら彼女らはそれぞれの解を見つけ出す。

「雪ノ下、ひとまず話そう」

「話すことなんてないわ」

彼女は顔を伏せている。顔を見られたくないのだろう。だが、それは無駄なことだ。俺は今、疲れて座っているのだ。顔が赤く眼が赤く、今にも泣き出しそうな、そんな顔を俺は見ている。

「俺はある。だから話をする」

「ずいぶんと傲慢なのね」

「俺はいつだって傲慢さ」

「なら、何を聞きたいのかしら?」

「そう結論を焦るな。ただ、話をするだけだ。まあ、その中に聞きたいことは含まれてはいるが」

「では何?世間話でもするのかしら」

「まあそんなところだ」

「ただの時間の浪費よ。無意味だわ」

「俺はお前と、お前たちと、過ごした時間を無駄だと思ったことはないけどな」

「あなた……らしく……ない……わね……」

「感情を騙す必要なんてないさ。笑いたければ笑えばいいし、叫びたいのなら叫べばいいし、泣きたいのなら泣けばいい」

「…………そう。前言を撤回するわ」

「ん?」

「あなたらしいわ、やっぱり。その雰囲気は、あなたのものよ、間違いなく」

「そりやどうも。んで、とりあえずこつちに来い」

「いや、よ」ニコツ

そんな顔で返されても…………

「はあ…………んじやそのまでいいや。雪ノ下さんとの話で出てきた、お前ののんだ条件つてなんだつたんだ?」

「そうね。私が母に逆らつたこと、覚えてるいかしら?」

「ああ、覚えてる」

「結婚相手を母に勝手に決められて、それに逆らったのよ。好きな人がいるから、と。そしたら比企谷君の退学、よ。姉さんからの条件は母への謝罪。そして、この場合の謝罪はすなわち、婚約を認めることになるわ」

そこで話を切つた。口が渴いたか、落ち着きたいか。まあなんにせよ、

「これでも飲め」ホイツ

決まつていて。水を投げた。

「あら、この中にはなにが入っているのかしら」

「水だ。毒も睡眠薬も入っちゃいない」

「そう。ならいただくわ」ゴクゴク

雪ノ下が飲む、ゆっくりと、ゆっくりと。そして

「ありがとう、美味しいわね」ニコツ

「そうか…………」

なんでそんな風に笑っているんだ……
さつきの泣きそうな顔はどこにいつたんだよ……

「なんでお前はそんなに笑つてんだよ」

「あら、楽しいのに笑つてはいけないかしら？」

「お前が今からやろうとしていることは決して笑えない」

「ならば、眼を瞑つてなさい」キユツ

「おい！まで！」

なんでそうなる。

どうしてそうなる。

「比企谷君、由比ヶ浜さんに伝えてほしいことがあつたわ。伝えておいてくれるかしら」「そんなもん自分で伝える！」

俺はこんなに足が遅かつたか？

なんで彼女との距離がこんなにあるんだ。

「…………結衣っ。楽しかったわ。ありがとう」ニコツ

「おい！雪ノ下！」

手が届かない。伸ばしても伸ばしても。

そして彼女は視界から消えた。

「…………さよなら」

そんな声が最後に聞こえた。

俺は救えないのか。

彼女を救えないのか。

なぜ救えなかつたんだ。

後悔は後だ。俺にはやるべきことがある。

—————

「…………結衣つ。楽しかったわ。ありがとう」ニコツ

「おい！雪ノ下！」

彼が走つてきてる。でも、彼は運動不足ね。全然こちらに近づいてないもの。私が今まで最高の笑顔を見せたのに彼は気にしてくれないのね。ちょっと、ほんのちょっとだけ、悔しいわね。

そして、彼に聞こえるかどうかの声で言う。

「…………さよなら」

彼が視界から消えていくわ。比企谷君…………由比ヶ浜さんとお幸せに

…………

私は眼を瞑り地上を迎える。

楽しかったわ。人といふことがこんなに楽しく感じられる日がくるだなんて、思つてなかつたもの。

……………んつ……………

ここはどこかしら。死後の世界つてあるものなのね。そんなもの信じてなかつたけれど。

……………下!
……………ノ下!

この声、懐かしいわね。今も耳で聞こえる。彼の声は耳に残るものなのね。どうやら、死んでも彼は私を離す気はないらしいわね。

「雪ノ下!」

「えつ!?!?」

名前を呼ばれて眼を開く。意識して開けたわけではない。それから、眼の前には白い

背景と、比企谷君と由比ヶ浜さんが……………

「やつと眼が覚めたか」

「ヒツキーが無茶するからだよ」

「どう…………して……………」

わけがわからなかつた。なぜ彼らがここにいるのかしら。

「ふつ、今回の種を教えてやろう」 フツフツフツ

「ヒツキー、きもいよ」 ニコツ

「えー、そんなにきもくないだろ」

「あなたの気持ち悪さは一級品よ」

「なんでこんな状況でお前がそのセリフを吐けるかが謎だ……」

「ほらほらヒツキー、説明してあげなよ」

「俺が学校に行く前に由比ヶ浜に連絡して、マットを置くように言った」

「人集めるのとかチヨー大変だつたんだからね〜」

そういうこと、ね。つまり比企谷君の策略にまんまとはめられたわけね。

「ということだ。まあ、俺が止めるのが最高のかたちだつたんだがな。…………つと雪ノ下も眼が覚めだし、雪ノ下さんに報告してくる」

「ヒツキー」

「ん？」

「ありがとね」

「なんのことだか…………」 ポリポリ

ガチャ

彼は外に出ていった。

「由比ヶ浜さん、その…………」

「…………いやーゆきのんが貧血で落ちちゃうなんて驚いたよ」

「…………えつ？ 貧血？」

「そうそう。やっぱり記憶ないんだね」

「いえ、私は…………」

「貧血だよ！」

「」ビクツ

彼女らしからぬ、そんな大声で放つた言葉の意味がわからない。貧血という単語ではなく、叫んだ意味が。

「ゆきのんが…………自分から…………落ちる…………なんて…………そんなの…………私…………私は…………」 ポロポロ

私はこんなに、こんなに大切な人を傷つけていたのね。

「ごめんなさい。ごめんなさい。由比ヶ浜さん」ギュツ

「ゆきのん…………ゆきのんがいなくなつたら…………私は…………いやだよ

……」 ポロポロ

「ええ、いなくならないわ。私は」

――――――――――――――――

俺は外でそんな会話を聞いていた。すると、

「比企谷君、報告はどうしたんだ？」ニコツ

「盗聴でもしてたんですか…………」

「いやだな。妹とは深い絆で繋がってるんだよ？だ・か・ら、わかるの♪」

「まあ、なんにせよ。そちらが来てくれるのは計算内ですので、計画どおりですよ」

「あはは。比企谷君の計画に引っかかるつちやつたか。悔しいな」

「んで、なんで近づいてきてんですか？」

「私、比企谷君に惚れちゃつた」

「…………は？」

「おいおい。美人からの告白をそんなふうに返したらいけないぞ！」

「いや…………なぜ？」

「比企谷君かつこいいもん」

「いや、でも……俺は……」

「雪乃ちゃんかガハマちゃんのどちらか、でしょ？」

「…………ええ、そうです」

「あ～あ。私の初めての告白が振られちゃったな～。比企谷君、頑張ってね」

「ありがとうございます」

だが、ここで終われない。絶対にしなければいけないことが、残っている。

「雪ノ下さん」

「ん～、なにかね？ 未来ある若者よ」

「なんすかその言い方。大して歳変わらんでしょ」

「だつて私は振られて傷物になっちゃつたんだもん」

「…………流していくですよね？」

「…………うん、いいよ」

本当に悲しそうな顔をしている。そんな、そんな彼女を見ているのはあまり悪い気はしなかつた。

「雪ノ下がこんなことしたんですから、結婚の件は…………」

「ああ、それは大丈夫。お母さんが諦めてくれたわ。それから…………」

ためてるな。よっぽどのことがあつたのか？

「すゞく喜んでた。私に逆らうだなんて…………みたいなこと言いながら、すゞい楽しそうだつた。だから、心配しなくていいよ。比企谷君は比企谷君の気持ちに従つてね」

「ええ、そうさせていただきます。ありがとうございます」

「じゃ、中の話も終わつたみたいだし、私はそろそろ行くね。ばいばい」

「さようなら」

ガチャ



ガチャ



ヒッキーが入つてきた。ありがとう、二人で話せるタイミングを作つてくれて。

「んで雪ノ下、体調は大丈夫か？」

「あなたの腐つた眼を見て悪くなつたわ」ニコツ

「ヒッキー、早く眼を瞑つて。ゆきのんが体調崩しちやうよつ」ニコツ

「俺にそんな力はねーよ」 フツ

これだ。この三人でこうやつて楽しくやりたかつたんだ。やつぱり三人が楽しい。この空間は一人でも欠けたらいけないんだ。

「ヒツキー!!?」

「なんだ?」

「まだやらなきやいけないことが残つてるよ?」

「え?なんかあつたか?」

ふふつ。ヒツキーはわかりやすい。ほんとはわかつてゐくせにね。ヒツキーは言い出しにくいから私たちのどつちかに言つてもらおうとしてる。

「私はヒツキーのことが好きです。だから、私と付き合ってください!!?」

「由比ヶ浜さん、抜け駆けはするいわよ。

比企谷君、あなたのことを誰よりも好きです。私と付き合ってください」

そして間を置かずに

「ヒツキー!!?」

「比企谷君!」

「なんだ?」

「返事は月曜日に部室で聞かせてね」

「返事は仕方ないから月曜日でいいわよ」

「…………ああ、しつかり考えておく」

「言つとくけど、どつちか片方を選んでも私たちの関係が変わるなんてないんだからねつ」

「ええ、その通りよ。だから比企谷君は自分の気持ちに、素直にね」

「俺に素直なんて形容は合わないな」

「そうかしら?」

「ヒツキーはいつでも素直だよ。それから、すぐかっこ悪い」

「なんで?俺チョーかつこいいだろ」

「へへつ、そうかな?」

「そうかしら?」

「…………んじゃ、俺はそろそろ。」

「ああ待つてヒツキー!!?」

「雪ノ下はお前に言いたいことあるみたいだし、俺がいたら恥ずかしくて言えないからな」

「そうなの?」

「え、ええ」

「んじゃ」

「ぱいぱいヒツキー」

「さようなら比企谷君」

ガチャ

「ゆきのん。言いたいことって何〜?」

「あの、その…あれよ…」

ゆきのんかわいい。おどおどしててかわいい。

「ゆ…ゆ…」

ゆ? お湯でも飲みたいのかな?

「…ゆ…結衣!」

「えつ?」

「…………だ、ダメかしら?」

「嬉しいよゆきのん！」ギュツ

ゆきのんが名前で、名前で呼んでくれた!!？やつたー!!？

「やつぱり恥ずかしいわね」

「うん、最初はね。でも少しずつ慣れていこつ」

「そうするわ」

――――――――――――――――――

ちゃんと言えるんだな。雪ノ下も成長したということか。なら、俺も決断しよう。どちらを選ぶか真剣に。あの日は戸惑っていた。どちらかを選べば壊れると。ならどちらも取らず、俺そのものがいなければ、と。そんな大回りで遠回りな道を辿つてようやく今だ。この一連の件は決して無駄じやない。雪ノ下は人のことを考えられるように

なり、由比ヶ浜は時間を大切にするようになり、俺は、美少女二人に告白されてそれを心から喜び、そして、それに対して胸を張れる。あの日とは違う。どうしていいかわからなかつたあの日とは。まずは小町にでも自慢するか。

こんな環境で過ごせて、俺は――――――――――――――――――――――

——— 幸せものだ

過去を振り返り、未来に向かう主人公。

「ねえヒツキー」

「ん、なんだ?……あ、やっぱいい。言うな」

「なんで!!?」

「いやだつてお前、また面倒なこと言う気だろ?」

「またつてなんだし!!? 面倒なことなんて言つたことないでしょ!!?」

「そうだな。お前の中だとそうなんだよな」

できる限り優しい声で言つてあげた。とても穏やかで、ゆつたりとした声で。いわゆる挑発的な言い方ね。

すると、由比ヶ浜は下に目を逸らした。

「そう、なんだ。ヒツキー、今まで我慢して私のお願ひ聞いてくれてなんだ……」

ははは、と乾いた声を発する彼女。
やばい、しくつた。

「あ、いやそういうことじやなくてだな。あのな、だからかつただけだ。お前がそうなるとは思わなかつた。悪かつたよ」

心からの謝辞である。

「…………じやあお願ひ、聞いてくれる？」

お願ひ？ そいえばさつき言つてたな。面ど――――まあいいか。

「聞いてやるよ」

「土曜日お出かけしたいな。ヒツキーと2人で」

「ん、まあそのくらいなら」

おい待て俺。そのくらい？そのくらいって言つたか？何がそのくらいなんだ？」

「やつた。じゃあどこ行くかだけど～」

「ここは意地でも由比ヶ浜のペースを止めてみせる。やつてやるです。

「本屋なんてどうだ？なかなか快適に過ごせるし、いろいろとあつて楽しいぞ」

「どこ行くかは後でメール送るね～」

……聞く耳持たず。いや、こいつの場合聞く耳持たずということばを知らない可能
性があるからだめだな。

深いため息を心の奥でついた。

「…………わかつたよ。待つてる」

すると彼女は満ちた笑顔で返事を返す。

「うん!!?」

一つ寝返りを打つ。これから始まつたんだもんな。あんな純粹な笑顔に裏を読まなかつた。読めなかつた。だから。

小町がご飯を用意している間、自分の部屋のベッドの上で古い話を掘り出していった。まあ大して古くもないんだけどさ。

「お兄ちゃん。ご飯できたよー」

下から小町の伸びた声が耳に届く。いやー、やっぱりこの声を聞けると落ち着ける。

「はいよー」

さあ飯だ飯。またあとで考えるとしよう。
さて、降りるとするか。

「さあお兄ちゃん、召し上がりー！」

「いただきます」

「うん！ いただきまーす！」

ふむふむ。やはり小町の料理はうまい。料理がうまいのと味がいいという意味でうまい。こんなことを考える俺もうまい。……なに言つてんの？

「それでお兄ちゃん、なにがあつたの？」

「…………は？」

いや、確かになにがあつたし、それを小町に言おうともしてたけど、なんでそれをお前が知つてんの？

「いやー、なにがあつたのかなーって思つてさ。お兄ちゃん、こないだからずつと眼が死んでたからさ。それで、今日はいつもの腐り具合に戻つてたからなにがあつたのかなーって」

「死んでると腐つてるって意味違うの？」

「なんとなくの感覚だよつ」

キラツ、と小町の目元に星が光つた。ついに小町は光を操るようになつたのか。お兄ちゃん、そんなふうに成長した妹を持ても嬉しくないよ。

「ふーん」

「それで？なにがあつたの？ねえねえねえ」

「わかつた。わかつたから引っ込め」

小町が前のめりになつてこつちに突つ込んできていたので追い返す。

「ああ、まあ、話すよ」

「おおおー」

その反応かなりむかつく。目をキラキラさせて、ほんとに光を操つてんじやないの？
まじで光が出てきたんだけど。錯覚？俺の錯覚なの？ちなみに錯角はいりません。あ
の辺ならギリギリ理解できて証明とかできてたんだけどなー。

「それでそれで！なんなの！」

「告られた」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「…………」

……

「…………へ!!?」

えって言え、せめてえって。微妙にハ行の色があつたぞ。まあ、へって書いてえって
読めるからここのでは関係ないんだけどさ。

「だ、だれにだれに！ 雪乃さん？ 結衣さん？ それとも他の人？」

なんなんだこの食いつきは。いやわかるよ？ だめだめな兄が突然告られたとか聞い
たらさ。でもちよつと、ねえ？

「その、ええと、どつちともに」

「」

「こ、小町ーー!!」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

じやない。いやでもほんとに返事がないんだけど。というか、息してるかすら怪しい

くらいに目に光がない。まさか俺のせいで小町がこんなことに。

……まあ普通に息してんだけどさ。

—————

その夜、由比ヶ浜からメールで細かい時間や場所が来た。10時に駅前。少し遠くに行くそうだ。

そんなわけで現在10時5分。駅前に俺はいる。俺がいる。俺だけがいる。由比ヶ浜は？駅前つてここだと思ったんだけど、まさか違う駅だつたのか？いや、そんなわけないな。駅前ここ、が千葉市内では一般的だ。一般的じやない俺がなぜ知ってるかつて？小町がいるからな、そんなことを知るのは難しくない。

「ひ、ヒツキー」

前から胸を揺らして、じやなくて息を切らしてやつてくる彼女。

「お、遅れちゃって、ご、ごめんね……」

申し訳なさそうに謝る彼女、由比ヶ浜結衣。語尾もだんだん小さくなつていった。

「はやく行くぞ」

「う、うん……」

はあ……。

「遅れた分ちゃんと楽しませてあげるね!!?」

122 過去を振り返り、未来に向かう主人公。

彼女もいつもの元気が戻った。というか、こいつって本当にうるさいんだな。
ない彼女を見ているのは辛いが、うるさい彼女といいるのもなかなかに辛い。
……まあ嫌いではないんだが。

元気が